下田太京

全

寓記

洋学文庫
文庫8
C 74

嘉永七年甲寅十月十四日魯西亞國の軍艦一艘豆州下田の港へ渡来せり同十八日川路君に從て江戸を發し同廿二日曉下田の境に達し稲田寺に宿る同廿九日故ありて泰平寺に轉宿す十一月四日己の刻に大地震ありて鎮るやいなや津浪山の如くに押来り下田の人家盡く流失す古来未曾有の変災なり予其中に在て危急の難を免かる幸と云ふへし故ありて君は先ちて同十一日下田を發し十五日江戸に帰る親戚に逢ふことに輙ち其変災の物語を請ひ礼りとして訥弁なりて言盡さず能はず依て眼に觸れ耳に入し事共を思出し書記して下田大おしと名付是を取て舌に代ふ故に唯吾見聞する頃かる事のみなれハ萬分の

41- 7470

一ふして全体を盡せる能はざる人其淺陋を咎むる事なかれ

是歟加永七年臘月記

下田大なし

十一月四日晴渡りて風なく海と清らかなる日なり今朝は風さ
ほんもよろしくしかも船が六十艘も入津せしゆへ品物も安ふ
なりぬと土地の者の語りし朝飯も給べは舞次の日ふ侍り居
しが去る朔日ふ異人上陸して本郷の福仙寺へ参り初て應接
接行こ二日ふ異船へ来られて三日ふも赤福仙寺にて應接
行こ都合三度も濟しゆへ明日ふ明後日ふい定めし江戸への
伝便らも行こなんと思ふれば見聞いたせし事ふを内らゆそん
と側なる用ふ同勤へ話ふ亀ひこそ本堂の客間へ引取て
そなて認ん居ゆこふ倚ふ地震ゆり出し山鳴り海も答へし
ゆへこい忘ろしと書掛けの巻紙を伝懐へ押込矢立を倚ふ

さし刀おつ取り駈出し公はいづくと尋るに大や玄関を出られしと
側向残られし飛出さ宇田川家来の六郎が此節使に来りておりし
小六が見て出掛しを見付て色蒼になりて外へ出ければ
雅文説くゆるなれば庭なる藪へ入るべしと皆一同に覚悟して
居たりしは鎮まれども漸く安心もなりけれど火の元等を付居
多りし所又ゆりしかど見れは油断はならじと覚悟して
堂の前後を見るにハ石塔倒れ石燈籠竿石なんぞハ折れて
折り当りハ餘程強かりしと思ひなりしに本堂へ戻りてみる中より外
より津波が津波だぞ早く逃よといふ声ひとつ大音声に呼ハ
りなりけるに一寸驚きて津波の様子ハ知らねども取るもの

も取あへず公を引連て逃出し我共も裡の方山を目当に飛て行海山
一度に鳴動し天地も山崩るるかと思ふ斗寺鐘ハ其まま大声共鳴
火を見たるといふ者もあり見るに畑も立上る様にて是ハ津波かと人家
の崩るる土煙り船ハ前町家根の上に帆柱立て奔りて小六ハ覚えて
思ふように公よりハ供もかしこれ行き根裾も幸ひに付額しなと宮手にて
見ては面目なし一刻なりとも大切の品物持ち逃出んとて先ず一番に
床の間書類と見るは床の間に掛け合へは取出して片付中も新
れハ三兵衛出でさされて土段をいで追ひかけ当りて待合居て
たを押出絵前押おろし持て飛出し裡の方を寺なる後の山寄へ
出しをえたりの居りける處へ飛入れハ残りたる人々ハ根津筆
田村與助と商人のミ供其外長持へ押込居たる左手傳ひ

持ちて出さんと金剛力を出してもあまり人に出しかねる小
舟を呼て乗んと押乗る方へ走り行見渡しあるに新しき
大きなる船の呼ぶとも答もなきに捨方なく渡に次第に押寄せて船
や人家を押碎き渡りの方より岩を砕くまた仕掛
を引抜き程へ出て船を乗へ出んとせども山岩より山岩を人を集め
岩を掛をそなへ出せと言付船をもんとせども先より山岩を為
を掛け垂れて有合の男女を集めて一艘持出せ大小
長持小者迄入て搬出せ此時渡り左右前後と押出せ逆巻
と持出せ長櫃投げ捨て船へ乗て根津田村早く知んと花き
そと言捨て元の船を見れば向岸花のごとく逆巻き

時又あるべしと言ひつゝ押寄る波の手より切入る山岩
つゝ多くの船ふ子供男女歌ふ利よて母親例ふ涙をたゝふ
態の事そと言葉を掛け山へ登て見渡せば素面変て海と
なり人家砕けて山を為す所を施方なしと
思ひ切公ふ小ぜうと船行公ハ中山頂と呼ぶ渡り有きとこ
ろ押分踏分攀ぶ登る手足い刺ふて血を出せども
せば異船い帆柱を縮ち左方へ傾海流み大や震る有かる岸
ふ無ふ光若男女泳り海面見渡して異船のたゝに中移役
ひつゝ〳〵へ〳〵て下されと南無阿弥陀仏南無阿弥と唱る者
こゝ数かまびすし〳〵又攀登り絶頂まて公ふ為ふ背面し主
後諸共を経て曰て金九祝ふ公ハ為ふ山を廻く

大安寺の後ろなる京師まへ伝住居山六山下へ落下りて荷物
を取ったまうんと夫く各配所を弁ず又波押て来るを荷物い
山の麓なる小高き場所へ取集むる潮も引あまい人の死骸
ハ数多打出て漂と居共海そこも所〻波に押て残る所〻衣類
諸々共皆なを実に涙もしき有様なり宮寺の寺い以ての外や
うんと落ちうんと落ちて森の中へ吉野のめく恭平まて是此上の
仕合なり残の家々出さんとて家内の騒て海をて来
る上方酒蔵幾りを荷よて鏡を抜て呑むもの所〻是い奇妙
と云事く欲い甘義の味所〻寺の方へ到りしは人家や舟
のこと礼拝山のめくと押込て乗へ乗込て家財をい
多ひく離を越へ藪へ入方へ出て様ず在しきへ入れい海の

の荷い箕を取て其の上を浸さるめへ荷物少しも濡されい是皆
と共合へて食物を解て宮殿を見るは先ず一番と庖厨へ
到りて見るい飯櫃い炊飯少し残り所〻茶碗小押付二三杯を
ずく食して諸々見る所所付けて出て此時人多く多く
打ち山へ運び出て本堂方丈厨共と海をい世話と生口へ
所〻の場を押込て藪深の方へ隠れ居て人の住ふ茶屋
ハ又の変義も恐を所をい今宵ハ野宿と覚悟して食料
の為に集る鍋釜抱ハ持出て宝無業を用をせし十人五一
盗見行出し是い寄たんと打出て和尚
を呼て東も所〻子供ふ
ぬと云ふも所〻夫を別をて泣も所〻金を

さうし鍋を提げ草履を穿てけるが衣類諸色其流
の外さう引上げ居る人々は月も出られぬ内に日足も
早く傾けば山ふかい地方の夫夜をし月出るまで幕を引張り
地面に油紙を敷き茣蓙薦筵を重ねて捨ひ貯へし
薦蓙の物を土瓶へ的焚火をさし温て例のまんぢを喜と
し何とも悪魔を拂ふ様に此山稲荷百姓家あるを軒も
何もなく津波に成る様を孫子やり逃
るなりし人々の世話ども混雑の越まらくどさを結ふり
こと一形に見えたる者へ為て世話をする婦人の祖母の家乃
ち婦人もそこへ為て飯炊に成ぬ世話をし仮拵
焚き昼夜共に都合に成て多人数食をする

なるべく夜〳〵粗末に氣の毒なる逆戻りなんと生涯に山の焚火
て炊して只水さへ貴なる白米にて茶も洗い
面なるべく蘇の真ひい鼻を御くなれども儀と及ばぬ不幸
なる内仕合なる大地日に当て釈迦さまの光なく
物の何色なるかなる様なれども只山々の海火は回し仮寝のその枕
席猪野平の住そと思へば此地も地獄の人に用人給人
多勢の士小人なれば七人なる人なる生命を
集て今日の始を為に拙者も家内天方の三人
なる者元は海ふとりなれば宛つしなんなく拵なる事な
と思へと孫子家中一生中人の中に命斗は助て
為家なるなく逃なる中て少〳〵安心せ〳〵定まるしるの災

変ハ可き江戸へ出でなん君父の安否も気遣はしく便りを待えん
と言ふの疑き乃至中世ハ地震の前乃出掛へ去るを足し立て
用人へ求めとまでにハ及ばし同勢一同立て一人と怪我の者
きるにハ我らも中立せり安居ハ恐く何るにやと中に強きも然る
それも従者なくも止まて秋を待ちみむり迄て秋も更けぬれ
ハ山風岸より吹下し室内ハ机に深渡り蒲団一枚かしこの
ぶり焚火の側へ草枕おかしまろむも中に雨の月音と言
ふ声に驚き起きて見渡せハ空一面に雨雲雨具取出し皆
し掛けまた手当致しき此上るに急がずハ因果の上乃因果
そと覚悟して待ちしに程なく雲も晴るるさて雷雨ありて
の晴間より星の光乃見へ来れバ先づ天文と志らしとて秋の頃

なるぞ待ちにける
秋の比常吾輩なれバ四方の山々晴渡り穏なる景色なれとも昨
日まで民の竈も絶なんに今朝ハ煙も雅て礎のみぞ残りける
立何を我家さへそれハ醉へるにその心なかりける公にハ森山
及一萬葉と同道にて此山猶る当て気き田畑の畔をつたふ
ハ行き村役名の旅館なる長安寺へ行きたる此寺能住言
みゆへ津波の難ハ無かりしより此秋是人のポッセット卯まで人石
きて公の仮寓へ見舞ひしより扨此度ハ宇田川の主家ハ
此所にて西方に本川と云ふ村のあり寄て行て在る席津波
の頃も見えず田へ山をわりて田の流を引掛しに田畑にハ
泥お寄る人の裂殺ハ数志らんれ引取るものもなく立終なる

なれバ蘆荻を掻て立行ハ中ニも三四家なる村もなく子の往還
なりて二人目し給ふ跡し見るハ皆ふりて聡く覚へけるニ前の
及ハぬ方角百人も有らんと思ひ行て物をも問ハしく声もなき
夫より宮前の古木を掻け出んとせしニ傍の樹木乃高枝ニ
川燈の流れ来たる掛り居り門前へ出て見れハ二十石船の帆柱
が流れ来りて横ふる是レ人家の敗屋棟梁縦横ニ打寄て
出屋ニ至ても有りしを帆柱以来りて家根を越へ崩く諸堵
へ出て見れハ十八ヶ所押流し御殿も皆流れて只名のミにて
往ハ北を此辺大なり乃至千艘もありハ雑破漂流し居る
時是見る下て親兄弟の行衛知れハ日あしく人か行き泣歎
を殺流さし家を探るもあり砂を穿たるもあるなり

思ひの外の事もあり山岸ニ至りけるハ門の前ニ流されて堂も無難
ニ存生せるハ寺の外ニなる仕合なり去ながら堂の近くハ破船倒
家を押潰しぬて開く屋根も見へず船ハ石船破損せし内
本川村の田の中ニ横倒りて掛ニ残りし七八百石積の一艘計りハ
損し多く見へたりし先一通り見渡して帰人の其家を尋
しるも知人なりけれハ哀れなく帰りを急く者なりけれハ又た並して
来らんとて立帰りて来る途中ニて不図も当所宿の乳母ニ会ひ
共ニ命の助りたるを悦びて先生ハ人様我なく此前村の百
姓家七軒の者も家ニ行て共ニ雑なく立退きしか尚ホ其人
されハ皆おのつから助るニ未だ行かぬハ皆知れずなりしと申て
何の心配なからん先生をも何ぞ来らハ早速知らせ参らせん先生ハ

人をつかはしてこれを尋ねるに又ものいはず立ちて
居たり傳言致して有れども元来ものいはずたゝずして二十間
ばかりを徒三人よりて尋ねしに彼三人の者共ハ是より遠き所にて
ハ一体ふるまひ村住中村彼兵衛
方へ集まり居られる天方伝ふる所迷ひて
居れハ此所なる所へ掛迷ひて
居所へ来る
少しハ酒一杯ものゝ与
与ハ物語を語り合ひ
ハ酒を
立られ
居る山
用ひ
の所中
伝ハ器酒を
三人
伝ハ
山へ
山ハ
禁を
大根を

空殺ものをいふまゝ
ものいはず
言ひ
野
思ひ
人
人
思ひ
山
山
人
人
人
三十丁
村人
名ハ
中村
村
村

名を給ふ蓮華寺村役人共も出迎ひ公の旅館の寺へ参りしぞ
由て孫行ハ玄関之前に段付の石に打寺号を廣盛寺と
云是も可なりの伽藍なり草鞋を脱ぎ洗足し座へ上りて其
今日の始終を告げ則ハ我より先に来り居る拙者此地ハ偏僻にて
孤村なれども前町に温泉ありて見苦しき家作なり寺にハ
風呂も湯も無ければ案内をせんと門前の新湯と申す家へ行き裡へ通
りて別座しき浴室ありしに投ずれば加減ハ調度よき合にて奥ゆかし
く味あし時の労を洗去りて愉快を覚えて帰りて公の部屋
く参りて一夜を同様に過さんとハ元より偏土の村役人共皆
も来り集ひて狼狽騒ぐ斗にて事ハ弁せずて一円に話合のうち
夜も更け日も没すれば夕飯を出さんとて膳を出し飯ハ玄米にて菜ハ

芋大根汁にて馳走なれど時の苦を思へば是も一段結構なり扨て
此地震起りしが是も危く津波の噂ぞ聴けり外の村居たる者ハ
何も驚き狼狽して身寄に物見を出せしに全く根のなき言の
ほか皆々後を立ちたれども誰か言ひ出せしと言ふ者も知らずて皆むるるも
此にて静まりて当時ハ今南に向かふハ断りて津波のおよびしよし
聞ゆ信濃国地震とて江戸にても人々の見物なるが小石川の
屋敷より発御になりて此地を出でて旅ハ時勢相に掛りしより畑
者へ至り此地震大に出で出し石ハ岸より転び落ち
もあるまで四んぞい崩く峠まで到りしに人家ハ残らず大損じ
山中の宿にて到りしは家も同じく大損じ三面の土蔵も倒し
其上焼失して治安ハ何れも大損じ市中残らず

倒し先火を少し吹しめ三度へ重ね吹く山中より拾遺
とらせて賞へ遣しそれ故に拾ひ取り為るべき常軒へ
一封の書翰を送り差出す白木ハ時の近道で懐中西を経
寝前より一杯頂戴と出地蔵の人に教へ下西の宿屋酒ハ一滴も
上来ぬ故名寝を度せ小根具ハ掛屋なるべしとて此人
より一組書翰を渡して不申西なる所ハ時乃山名思ひ出し宿の経
ようとなれば然に従て寝れより
明るいと西と云ふ公六時の鳥鳴より下西を行へ来るより少く
早く起き門戸を出流を渡て口を過ぎ新宿に至る
時なるを知れば冰も強りて雪も降る下西を出る時一里経
南を寒き山間四人左宿後の強雪ハ明経る時思ふ

為に物を吹ケ代を掛の為きハ公ハ出と為るを小合ふハ供人も
減少し色ヲ三人徒三人用人共ヨリ七人ヨリ公ハ歩行
行き為ら今日人の中せハ時刻三度と今日一度下西又ハ沢限
の中に既南来て初て道の沢限ノ橋ふ地蔵ヨリ出し
門口へ主従休を記出し地蔵様まれハ川路ヲ乃橋ヲ小
為ら為と興と為を稀の織を為し先の茶を呑て茶を煎く
五ヶ為人洋波くその彦を中大小和の所を紙記出し山へ迫んと
急ケども為ら是元弱き故家内の為ふ所れ断くなれ断く
より玉小波ヨリ直掛くれ第士山へ登ら九地して一句も出ず息を
ヲて喝渇く家来山下へ立寄り酒を頂き酒格より酒を少く
汲ム主従休た本の茶ヲ入て断喝を潤して夫より山を出越

[illegible]村の庄屋の方へ[illegible]枝を[illegible]苟あハ殘[illegible]海[illegible]地震
の[illegible]て近[illegible]支[illegible]へ[illegible]れ[illegible]皆
[illegible]家[illegible]海[illegible]聲に[illegible]海乃
[illegible]出[illegible]を[illegible]
[illegible]公[illegible]師用[illegible]海[illegible]
[illegible]村[illegible]地[illegible]急[illegible]師
用[illegible]
海[illegible]用[illegible]
[illegible]行[illegible]異[illegible]津波[illegible]揺[illegible]
[illegible]水[illegible]震[illegible]用[illegible]修[illegible]
[illegible]食料[illegible]下田ハアメリカ

聞き[illegible]所別ハ一流[illegible]家[illegible]流[illegible]
強[illegible]海[illegible]是ハ[illegible]無駕用[illegible]
[illegible]一流[illegible]
[illegible]流[illegible]
[illegible]用人[illegible]川上氏[illegible]
[illegible]用人[illegible]
[illegible]
[illegible]津波[illegible]
[illegible]大砲[illegible]左[illegible]
[illegible]
[illegible]日本人[illegible]
人[illegible]砲[illegible]引上[illegible]載[illegible]
[illegible]
[illegible]命[illegible]

申けるハ寝かりしに津波ハ異船へ向ひ目ミに手を合せてぞおもむ
きし宿坊を定めしものハ皆ミ蛙銀壊ちて下田表の人ミハ饑渇に
及ぶ事なれバ川路中村両君より米銀多く出され救の米を
施されしが乎行さるゝ命せられ救の小屋を建てられ我も関に
在る者ハ何ぞも寝所より大に我ハ持ちて取具なる囲ひて暖に
臥しまりしが日毎に会ひ始め初月悉く語りかはし
床の中まで只独り袂を濡し我ハ其の眠りがたき夜にて少
し地震の動きせしが我のみの涙と覚へ侍り
明ぬれハ直ちに出すに叶ひかたき例より少しすくす起き温泉
何ひて宿を出てし所に是を借りて用人なども来り候ハ津波
にて身ハ骨折なりて骨折なされしたびそ沢山なり候へと目際

古是迄ハ居りし日も過て此時も宇留川来りけり豊島津浪後
初て逢ひ津浪に始末を承り語り合ひし添出すして互に喜びぬ
り且骨繁昌せし今ハたゞ言ふことし嘆きいぬすり互に吹き
此の頃り語らむ事も知れハ先ず言も出来ず数多人ハ其まゝ帰る事を
急ぎて其都合し川路の君より頂戴を致したりし君ふたゝび
与へ与ふ嘉永しも手板拔き兄あハ年安なり当月廿日に新たに
同所表の内長屋焼かしと申さむと風さふ四方に火ハ移り
申条申たり
古しきりて八月にて今ハ公の用向につき承知る様に出立へ上けれハ重
作宇留川田人と添失の君臣孫を宇留川繋き下田へ参りて用事
出ますや入る五時の此宿を立ち出て中乃郷と云所へ向し也

折節雨降りけるを雨装束にて出ありけれ 然る所へ行く程に中々の村まで
参り 先づ七兵衛の方の内へ行き 此由を申しければ 一事の子細を物語り
其人々聞いて其の家内へ言付けり 其後佐兵衛とか云ふ人を
召連れて 稲田寺といふ寺の親谷の方へ頼み行き 漸くにして残る者の家内
て呼び出せば 今日も主人は留守へ遊びに行き 本村前垣内の少し待ちて
出せり 時に其の処に悦喜の体にて 然らば 何とぞ こゝらに
参らせ申すこと 其の銅を取り出し 先づ酒調へ
差出したる鍋に先づ茶を入れて飯を炊き 何事も不慮の体
なりし事を 皆悉く尋ね 岩吉の民屋へ持ち行きて 鍋を抜き
垣を越して 折り取りて 焚火に掛けて焼き参らし 又其人々は 其夜で
茶漬をこしらへ 折り取り 又其人々は 桶を持ち泉を汲みて来りしが 徳

利の生れにて酒を沸し 其外食事を始めあり 是又其中乃
一具なり 食事終りて 雨も止みて 雨具を脱ぎて 身は休し 且又砂
糖を菓子に饗應を 其後所持の品高宮 宇田川飯蔵の地図一
巻取出あるぞ 其合なる 小六が思ひ出る 然ぞ 日も未の刻に傾けば
今は止め立て泥深なりし 思ふを一つに纏めて 石道し 人に
急ぎ合せ立去りぬ 富士山脚をば 道近し 之山路で 中々へ下るなれば
其に七兵衛の方まで其内語りし 主人大に悦び 飯蔵乃地図
手に入りしが 留守は預けて 悦極めし 帰りを急ぐなれば 又重
てと言置て 道遠き宇田村へ急ぎし 小六が 此は帰りあり 先づ
用人へ一礼し 其人々の伝言も申しおはりて 次の方乃間取りて
へと捺折を 小六が亭の移せしを 公より申立て 急ぎいんとの沙汰

なれハ例へおいて今日の始末を拝せしにぞ又家臣との仰なり返ゝき
まで此面倒なることにして是あるしに都人縁りて出させしハ今
日異船乃大砲を陸へ引上けたるを見物せしにバッテイラを纏て
載せし大砲二挺ぞ宜敷と申しに陸へ引上けたるぞ手際なる積り
にあらて中村君取りし候の届出候今日も異船へ参られし異
人乃噂しきやせしハ此頃山より火事より火事減るあれバ見たい
地震の節浦賀の変事しけ安心なるる紛れしなりとの出なり又或
人の中にハ此頃船役らせしが館繕大きな玉なりしと見たい人あるに
少しよし　西異人より北方の仮役ニへ備船差出し申す　左のとし

阿部候へ　時計付オルゴル　遠目鏡　エレキテル

筒井候へ　徳利　詳ナラザルニハ略ス

川路候　大鏡　敛　天球　地球　黒羅紗（儒子ナ）

村垣君　針箱　羅紗

古賀君　詳ならざるハ略す

中村君　蒸気車雛形　羅紗

森山氏　書物　羅紗

浦賀よりも迄ては大やう五日もかゝり是より九日と云ふまで西つ数隔しく
雨降りて四方の山々峯々に向雲掛りて黄々と赤々その漸く高く
なり西丸りの時分より公ハ下田へ出なされと脱出して何も小倉候の御順なり
因幡前田家が是非と備しこのなれバ記りて当方を請負
松崎ハ大砲を陸へ上け方手際なる定仕掛をバ見せんとて伊三
郎と云へるもの大工のてまへ何かなれバ中村君子従ひて今朝

生物へ手を付け豊饒を求めんとし地理を考へ国勢
中村氏と議いを湯物へ参り一泊致して明日と前所を通
りしが是まで第五、只さへしに今日八所家より珍しく茶の粉
餅所拵へて高砂屋の店所を調へ
明て茶を飲し少し茶菓子を出す調へ
も運ぶ為なるべし村より何合茶を食べし次第と相成たる
浮世の浦に米穀
浮説議の上諸家共人数職分せられ浮説の当家に準せられ
回勢八人ヶ合毎人に江戸へ帰るべし用人より浮説の礼心乃
中ふに帰るべ思ひ一ものも出して中ふ者て
為に小六を呼れて お供より相乃餅俵を次第なり帰て不
都合なるべし帰るべしと帰れ小六思為を出して不

都合なるべ出乃都度乃より引き抜き鉄砲を調へし江戸国内者と任せ
と若を移して為るべ出せば帰て給へよ首達に明屋十万
生用意をとの云付なるべ異て多
成た仕へ人に毒薬を中人徒まて吉田吉兵衛と
中方人に流れを中総て乃頭に信濃屋吉
移をより日も夕多と及に江戸中村宮と帰れ中村宮と帰
仕方を帰たり大砲上ケ方尺て来り義情強て学せり車
の仕組に日本て移す仕方乃技を
調へて西洋人に雇用なるべ我国内に百人と掛るものなり
拾人に異形を組に論くなる屋一を出す日本をお来なり車乃
仕掛に造ぬ中村宮に学ぶ後と来て

是等の修覆に用ひられて行を従文待せしが今も法の意付を積文
字にて見ゆめり 西国の変義乃風雲の何によりてか 其子は是園来手二百
年依頼せし只今前程と上奈候てそ 西の方に有る 数多の事なれ
ば明和是国を改まりし先々ならば其頃まけと 其園へ移りて直
ちにかく其後の事には船は西国の沖合に繋りて居るは船は地理案
内に行かれは船を場所に残して 今宵は此手一君と申出て行くも
手前は此所を明日作り 同勤ならんには 出張を今なる無事の通を
旅宿にハん迷も指味ハありけれど 聊用意を致しまい 公儀へとて
京様に於て一橋作て御用乃別を賭けり
此夜の酔にて寝心もよかりし 翌日地震にて出る起されて思案ハ
其の家ハ潰れて地震が移りて 来りし時 此者ハ少しの由れたる處く

遠の方ハ頓てなんとて思へたる 又服りを従して 着替て起き出
ば大雨東風の頻なりし 立出る者の流しまて 手洗口嗽き称號して 名
ハ首なりし前の此地もなかりなり 程なり 其ハ宇田川へ脇とて東
京輝し 公よりも御目へ之御の仕まり 西国人へ來りなよし 将軍江戸より
其服を着て来る人ありといへども 不出ありて 其両を迎へば 城
の此番衆二三の者なり以其服等 国君の安居へいそんとあんしぶと
重臣の様子も何とて様ハ何し 古の御人方に江戸を発して今此へ
来りたるもの又其兵ハ 何にても 性我ハあらず 其を召候し給
ひて江戸ハいかりとある様子 様子にハ残なく 去る日 焼失せり
湯島にハ者も候ひしなど 伝甫宅ハ焼されたり 外にハ変わらず
とも有りしと 頼り早て 本日乃英作宿へと 急ぎ行 公へも伝

由言上せ候時小六れい吐沢所用ありて
所為の上高を當て所用機年に八丈萬端ありて所
き為除に布ありて引不高を以て所れと晋
形家の毒を生れ流布と異なの富内のもの石の性
よ面けや情書めんてぞ来るの米も苦敵強きり此表ものも
牧茶を出るり是程を一面のまこ知れきるとくあるを徳き
なりし生年小伝も揺へに赤松より下面表へ行りをあり小六もまより
知りて坂商異を面へ明る義是物きりし其に紙を五面
人に節くぞけあり是に幸に好き幸より今人物をくしを
連て坂て黄沙面しと小六も以れせり最も時刻みあり
多此に金をもをせりとやせを小六用意の振り飯粥へ

長兵衛に袖を取て而出し をを金して下面の地乃足細をふこ形を郡
細帯し且に吳松の大砲も法へ上げ多を多を兵て強ん
を面倍れに者人も皆く粥ものを殺年矢年をよりしき故
田を世ん年をを三人共を面をりしを津波の報をん面を
いまに生伝行付ぞ荒海を家を福仙寺をを前
まて古賀名に出金をり 峠山の根に人家行一二軒程獨り
行新田所の行をに二三軒程獨り三丁目を親舟
を被海を乗て人家を接して大根 池の丁を通りに天
方乃て面金を中村名の住伝を津波の後に吳松へ住を
到て来ぞを海岸を強を伊勢丁を到りに
先生と呼ぶを乃人行を住伝を坂商異を知る人

また洋夷の侵掠を恐れ彼の住所定に海岸ふかく大砲を命ず中略を省略彼を一名ふ押上名和に迎ふるものもあり和泉国と陸地に迎ふしたるとも我又ハ本柱松の名まて発うしぶ是もふくぐりくりて明うるものしとも必死生の決定人狂の名当し命年ふ明うを今ハ長ふ発ふるふ彼用物を業なし今始めて人新に三重も先ハ第一番の貫を仕の次第なふ弾丸を拵ハ蓋一ツ弱くを引れて仕ふるり叔父ハ今まて四番ハ次と仕り後り行頃ふ宇島の弁天と中島ハ名ふ五十二門の大砲を海の方へ向け二行ふ列して押ふ並べ海へ蓋を敷へく並て何ふ業中ハ蓋をし幡を塗り火門も四ツ幡を塗る

廿四ポンド 短筒

口径　五寸五分
長サ　七尺五寸　大帯まて六尺

廿四ポンド 長筒

口径　五寸五分
長サ　右まて五尺トロイフまて一丈六尺
ノ　十八門
ノ　三十門

八十ポンド

口径　八寸五分
長サ　右まて九尺径り五尺九寸
ノ　四門

[illegible]を[illegible]へて小屋を拵へて異人を入れ小屋の
[illegible]を出し[illegible]日本かるたの[illegible]
[illegible]を出して見せる[illegible]ラロシヤキセイトと申す
生方まで生の掛り[illegible]を[illegible]て拵へ[illegible]
病り海[illegible]を巡見[illegible]
て行[illegible]淋[illegible]
[illegible]海出せ[illegible]舟渡し[illegible]
[illegible]を洗[illegible]ニヤポンを用ひて洗[illegible]バッテイラ大[illegible]
大工[illegible]仕[illegible]せ[illegible]松の先木を[illegible]割る[illegible]板を割て[illegible]
[illegible]を拵て[illegible]の[illegible]
[illegible]を[illegible]細

工[illegible]異の生[illegible]を五三[illegible]
小[illegible]国[illegible]帆[illegible]の[illegible]袋の[illegible]
異人[illegible]又海[illegible]を行[illegible]柿[illegible]村[illegible]至仙寺
[illegible]アメリカの石塔三本建て[illegible]文字[illegible]
[illegible]を[illegible]
[illegible]出又[illegible]異人上[illegible]元の
[illegible]異人の[illegible]
[illegible]異人の指り[illegible]
後[illegible]洗[illegible]又異[illegible]
[illegible]小[illegible]
[illegible]
[illegible]

行くべきなれと役人なの五郎行旦日に暮ぬ程の事に
なりぬるに元の海を打越て定る所もなきまゝに
是を仕て行ぬ木の根村と申所に
別れのなごりを惜ませんと酒肴を調へ
津の国屋に立寄て酌とりて出し
外の方へ若是程なりとて
院宣の旨ばかり父を案じて又京へ
男乃殿にあり是に於て小六を召て蓮
華寺へ立て使ひ是に
て申すは常盤は世を小六の名を
召とのなれは是に細を相語双方に結ひ
なく結ひ

なりぬる今日江戸と下田の中間に
此所に日暮の人馬も相そくなりぬ名残は
を先て立ぬる家来のものは出村の
下田に立て蓮華寺へと急きしに今は十四の
山の縁へ参る用はなく
庚申堂へ先が用人なる
相を待ちぬ月隠に
詰なんとのなるとは術して
呼て例へは公へ恩徒を奉く
相一次まて九ふしを
相右の六ヶ敷なる人の
とあるは岡本此所なるは
下田の長崎へ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]